

2019.11  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

# とみ やく 富 薬

# 11号

第41巻  
No.364



クコ *Lycium chinense* Mill.

(ナス科 *Solanaaceae*)



生薬 枸杞子

**生 薬** クコシ（枸杞子） 秋、完熟した果実を採取し、果柄を取り除いてしばらく陰乾し、さらに外皮が堅くなるまで陽乾する。

**成 分** カロチノイド：zeaxanthin, physalene、アミノ酸：betaine、 $\beta$ -sitosterol、linoleic acid、vitaminB1、B2、C等。根皮には kukoamineA、B、C、D等。

**効 能** 強壮薬として高血圧、めまい、頭痛、肝臓疾患、貧血、虚労、無力感、腰膝の疼痛に応用する。杞菊地黄丸などの漢方処方にも配合される。疲労回復にはクコ酒を飲用。枸杞子粥として食用にも用いる。

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



『神農本草経』（1C-2C）に「枸杞、一名杞根、一名地骨、一名苟忌、一名地輔、味苦、寒。平沢に生ず。五内（五臓）、邪気、熱中消渴（糖尿病）、周痺（全身の疼痛麻痺）を治す。久しく服すれば、筋骨を堅くし、身を軽くし、老に耐ゆ」と記され、古くから知られていました。『図経本草』（1062）に「枸杞、常山平沢、及び諸丘陵坂岸に生ず。今は所々にある。春苗が生え、葉は柘榴（*Punica granatum*）のようで軽く薄く、食品にもなり、俗に甜菜と呼ぶ。その茎幹は高さ三五尺で叢を作し、六月、七月に小さい紅紫の花を著け、随って紅実を結ぶ。形は微し長くして棗核のようだ。その根を地骨と名ける」と葉を食用に、実と根についても述べ、続いて「今一般に相伝えていう、枸杞と枸杞の二種は相類しているが、その実の形が長くして枝に刺のないものが真の枸杞である。円くして刺のあるものは枸杞であって、葉に入れるに堪えない」と二種類のクコについて記しています。『本草綱目』（1590）では「古代には、枸杞、地骨は常山のものを取って上とし、その他の丘陵、阪岸のもののみを用いられたが、後世では、ただ陝西のものだけを取って良しとし、また甘州のものを以て絶品とする。現に陝の蘭州、靈州、九原以西の枸杞はいづれも大樹であって、その葉は厚く、根は粗い。河西、及び甘州のものはその子が円く、櫻桃のようで、暴乾すると小さく緊って核が小さく、乾いてもやはり紅く潤い、味は葡萄のように甘美で、果として食べる」と、常山のものと陝西のものとは違った植物で、陝西のものが良品だと言っています。

中国の本草書に二種あることは、現在『十七改正日本薬局方』（2016）にクコと *L. barbarum*（ナガバクコ）の二種が収載されていることと合致します。常山にあるクコはほぼ中国全土に分布または栽培され、台湾、朝鮮、日本では北海道以南に分布する高さ1-2mの落葉低木で、根元で多数分枝し、叢生しているかのようです。枝はよく伸長し、しばしば刺状の小枝があります。葉は互生あるいは束生し、全縁で卵形から長楕円形。花期は長く5-9月、葉腋に花冠が5裂する淡紫色の花を咲かせます。果期は8-11月で花と赤い果実が両方見られる時期もあります。果実は卵形から楕円形、長さ0.5-2cm、径4-8mmで赤く熟します。一方、ナガバクコは甘肅、寧夏、新疆、内モンゴル、青海など主に中国北西部の乾燥地帯に分布する落葉低木あるいは小高木で、高さ2-3mになり、幹や太い枝には刺は無いが、葉腋に短く細い刺状の枝を生じ、葉は狭倒披針形で12cmと長い所などがクコと異なっています。果実は赤色、長さ0.8-2cm、径5-10mmでクコより少し大きく実ります。現在中国から輸入している枸杞子は栽培地の名を冠した「寧夏枸杞」です。

クコは国内に自生することから古くから知られています。『本草和名』（918）には「和名奴美久須祢」、『倭名類聚抄』（931-7）には「和名沼美久須利」と早くから和名があります。『延喜式』（927）には諸国進年料雑薬に尾張国の廿斤をはじめとして15ヵ国150斤（約90kg）が進納されています。江戸時代になると本草書に詳しく説明されるようになります。『大和本草』（1709）には「和漢二種あり。二種共に用ゆべし。唐枸杞最も味厚し。子を葉に用ゆるによし。……葉を生にてもゆびきて、ほしても食すべし。和漢共に味よし。茶にかえて用ゆ。本草に茶に代わりて飲み作ると云えり。……其の実紅にして愛すべし。身を軽くし、氣を益し、眼目明く、常に服すべし。目明の功すぐれたり」とあり、茎葉を食用やお茶にすることが述べられ、一昔前に高血圧予防を期待して「クコ茶」が健康茶として流行したことを思い出させます。末尾に「唐の枸杞にも二種あり、倭枸杞も亦眞枸杞なるべし。皆用いるに可」といい、和産を眞の枸杞と云っているのは国内に枸杞は一種しかなかったためと思われる。園芸的な価値も高かったようで『花譜』（1694）には間垣に利用し、正月には切り花に、盆栽にして楽しむことなどが記されています。（村上守一 記）